

カンボジア王立図書館及び『カンブチャ・ソリヤ』の 仏教変革運動における役割

調 邦行

Role of the Royal Library and *Kambuja Suriya* in the Buddhist Reform Movement in Cambodia

SHIRABE Kuniyuki

Abstract

In the beginning of the 20th century, the reformation within the Cambodian Theravada Buddhist Mahanikay School brought about a major shift in traditional Buddhism, which followed the Pali scriptures and emphasized traditional monastic practice, by facilitating the adoption of the scriptures translated into Khmer. The movement was driven mainly by the translation of the Pali Tripitaka into Khmer, publication of the texts, practice based on the scriptures, and preaching of the Buddhist doctrine in Khmer. The Buddhist reformation in Cambodia was a qualitative movement that transformed Buddhism from a religion for the salvation of ascetic monks into a religion for everyone.

In 1925, the Royal Library was established with the aim of collecting and preserving important works on Cambodian history, culture, and religion. It is speculated that the intervention of Buddhist innovationist monks was behind the establishment of the library. The library collected a great deal of literature with national value such as Pali Buddhist scriptures, Sanskrit literary works, chronicles and works of art, and published materials. In 1926, the library started publishing *Kambuja Suriya*, the first Khmer-language magazine in Cambodia. The innovationist monks researched and translated the Pali scriptures, while actively writing articles on the Buddhist doctrine for the magazine in the early days of its publication.

These activities laid the foundation for the establishment of the Tripitaka Commission as a national project in 1929. Thereafter, Cambodian Buddhism transformed itself into a national religion with the support of the common people. The Royal Library served as a base for the Buddhist reform movement in the late 1920s, and *Kambuja Suriya* acted as a medium for Buddhist evangelism with a focus on the masses.



目次

はじめに

1. 王立図書館の沿革
2. 仏教変革派の意図
3. 『カンプチア・ソリヤ』と仏教
 - 3.1 初期『カンプチア・ソリヤ』の概要
 - 3.2 『カンプチア・ソリヤ』(1926年第1号～1927年第7号)掲載記事一覧
 - 3.3 記事に見る在家への伝道
4. 王立図書館及び『カンプチア・ソリヤ』と仏教変革運動

おわりに

はじめに

20世紀初頭、カンボジア上座仏教モハーニカイ派¹内部からの変革運動は、経典をパーリ語で読み、慣行的実践を重視してきた伝統的な仏教に大きな変化をもたらした。その運動は主にパーリ語三蔵教典のクメール語への翻訳と翻訳仏典の普及、またパーリ語に通じた僧だけに理解された仏教教理をクメール語に翻訳して一般の人々に伝道することによって進められた。上座仏教は涅槃を目指す出家者と現世の幸福を求める一般の人々の二重構造的宗教であるといわれる〔石井 1969:172〕。カンボジアにおける仏教変革は、出家者のみが救済の対象であった仏教を在家者も救済の対象とする仏教とするため、一般の人々でも教理を理解できる仏教へ変化させようとする質的変革運動であったといえる。

王立図書館は仏教変革運動が進行する1925年、従来のクメール図書館が名称変更され、カンボジア各地に眠るパーリ語仏典やサンスクリット語文献、年代記など国家的価値のある文献や芸術品の数々を収集、公開し研究して印刷、発行することを目的として設立された〔カンボジア国王 1925:25〕。また、1926年に王立図書館から発行された『カンプチア・ソリヤ』は、カンボジアで発行された初のクメール語による雑誌で

ある〔Edwards 2008:194〕。この雑誌は後に宗教、歴史、文学、言語、旅行記など幅広いテーマの記事を掲載したが、発刊当初は仏教記事に比重が置かれた。仏教変革派の僧たちは王立図書館に集められた文献類を研究し翻訳する一方で、積極的に記事を執筆しメディアによる在家のための説法や仏教教理の解説を試みた。

王立図書館と『カンプチア・ソリヤ』に関する先行研究では、エドワーズ〔Edwards 2008〕、笹川〔2006〕、シーガス〔2000〕などがある。エドワーズは王立図書館がフランス人東洋学者シュザンヌ・カルプレスの働きかけによって、古代の聖典を収集保存し、調査、再生産するため、1925年に設立されたとしている。1927年から1930年までに6万冊余りの書籍と5万2,000部の印刷物が販売されたことがエドワーズの研究で明らかにされている。また、図書館車が定期的に地方を巡回して民話や歴史書、仏教書などの普及に努めたことや、図書館では発行物の立ち読みもでき、1928年には僧と一般人を合わせて5,000人以上の閲覧者があったことなど、カンボジアの知識人層が同図書館の出版物に親しむ状況が明らかにされている〔Edwards 2008:193〕。エドワーズは仏教変革が、カンボジア仏教を土着的宗教から民族の宗教へ昇華させたという視点に立つが、王立図書館と『カンプチア・ソリヤ』がその中で重要な役割を果たしたとする考えは傾聴に値する。

笹川は、1923年に設立された王立図書館が1925年に改組されフランスの関与が始まったとしている〔2006: 88-94〕。また、王立図書館と仏教研究所の活動が混同される傾向があるが、1943年に仏教研究所が王立図書館を併合するまでは別個の組織として活動したと指摘している。『フランス極東学院紀要』の年次報告から1934年の書籍・雑誌の刊行が7万部、1939年は5万7,000部であったことに触れている。『カンプチア・ソリヤ』については、発行部数が9月号800部、10月号850部であったことや、その読まれ方が記述されており、同誌の普及度を理解することができる。また、同誌が歴史、文学、文化など幅広いテーマを扱い、植民地時代のカンボジアの人々の知識涵養を

促したことから、同誌の創刊に言及する研究は多いが、近代カンボジアの歴史・文化観の創出における役割や雑誌全体の傾向などを検討したものは少ないとしている。

シーガスは、カンボジア文学に関する一般的研究の経緯について論考する中で、『カンプチア・ソリヤ』の目次が1943年から文学部門と宗教部門に区分されたことに注目し、同誌における文学に対する認識が高まったとしている。

以上のように、王立図書館や『カンプチア・ソリヤ』に関する研究はあるものの、それらと仏教変革運動の関係という観点から研究されたものは管見のかぎり見当たらない。また、同誌の記事では文化や文学に焦点が当てられ、仏教に関する記事分析については置き去りにされてきた感がある。しかし、王立図書館の設立経緯や同誌の編集方針に照らして、仏教に関する記事は重要であり、とりわけ在家の実践倫理としての仏教の普及に重要な役割を果たしたといえる同誌は、カンボジア仏教変革を研究する上で欠かすことができない文献である。

本稿では王立図書館の沿革及び設立目的を国王布告に基づいて確認し、併せて同図書館が発行した『カンプチア・ソリヤ』初期の仏教関連記事に着目して、当時進展していたカンボジア仏教変革運動の中で両者が果たした役割を検討することを目的とする。『カンプチア・ソリヤ』は1928年以降仏教記事の比重を下げたとされるため[Chheat et al. 2005:18]、1926年～1927年の同誌に焦点を当てて論考したい。なお、本稿は「カンボジア上座仏教僧チュオン・ナートの視座」研究の一端として、彼をはじめとする仏教変革派の活動理念の解明に関連するものである。

1. 王立図書館の沿革

王立図書館の設立経緯について、仏教研究所が自ら編纂した *THE BUDDHIST INSTITUTE A Short History* (ប្រវត្តិសង្ខេបបុព្វសាសនបណ្ឌិត្យ 以後『小史』) では、「記録が少なく正確な設立経緯は明らかではない」としな

がら、「同図書館は改革志向の強いシソワット国王とタオン、ルヴィー・アエム、ウム・スー、チュオン・ナート、フオト・タートなどモハーニカーイ派の僧たちの要望を叶えた結果設立されたと確信している」とし[Chheat et al. 2005:13]、図書館開設に当たっては仏教変革派の僧たちの働きかけがあった可能性に言及している。このことは、仏教変革派が仏典翻訳と大衆に向けた仏教の伝道拠点として同図書館にその役割を期待したことを示唆している。

同図書館は1921年2月15日付国王布告で開設された「クメール図書館」(បណ្ណាល័យខ្មែរ) を前身とし、1925年1月15日付国王布告第2号で「王立図書館」(ព្រះរាជបណ្ណាល័យ) に名称変更されたものである[カンボジア国王 1925:24]。同布告で王立図書館はカンボジア国王と高等弁務官の後見のもと、高等弁務官が任命するヨーロッパ人一人とカンボジア内閣によって運営されることが規定された²。運営委員長は国務宗教大臣が務め、委員会は芸術大臣、教育各大臣に加え国務宗教大臣が指名するトアンマユット派³とモハーニカーイ派両派から各1名の僧、教育大臣が指名する知識人2名、芸術大臣と芸術連盟それぞれが指名する芸術家2名のメンバーで構成された[カンボジア国王 1925:26]。初代館長にはシュザンヌ・カルプレスが任命された[Chheat et al. 2005:14]。

国王布告では同図書館の設立目的を「カンボジアにとって国家的価値のあるクメール語、パーリ語、サンスクリット語で記された政治、歴史、美術、仏教に関する本や貝葉文献を収集保管して展示し印刷発行すること」、さらに「仏教美術館を造るために仏教関係の文物研究を行うこと」と明記している[カンボジア国王 1925:25]。また、これらの活動をとおして三蔵の翻訳編集に関与し、高等パーリ語学校⁴の研究を支援することも視野に入れていた[Chheat et al. 2005:15]。

同図書館には書籍・写本部と印刷・発行部、さらに美術部が設置された。書籍・写本部は王室、内閣、各省また各地の寺院から写本や仏教関連文物の収集に当たった。印刷・発行部は印刷部門と書庫を備え、クメール語による仏教関連、民話、歴史、研究書、辞

典⁵などの書籍を印刷出版し、古い貝葉写本を新しい貝葉に写し、更に紙に印刷した。美術部はさまざまな言語の書籍、写本、仏教関係の品々を展示した。国務宗教大臣ノロドム・ピアノヴォンは各省に同図書館の開設についての告知を出すと同時に、貴重な文献や文物を寄贈するよう要請した。この通知の後、各省から図書館コレクションへの寄贈が進んだ [Chheat et al. 2005:16]。1926 年、同図書館は月刊誌『カンプチア・ソリヤ』の発行を開始した。なお『小史』では、この雑誌の発行目的はカンボジア人を啓蒙し、貝葉仏典から抜き出した仏教関連の説明記事をとおして俗世の人々の仏教に関する認識を深めることであったとしている [Chheat et al. 2005:16]。

1930 年、カンボジア、ラオス、コーチシナにおける仏教を保護し、三蔵のクメール語翻訳を完成させるため、仏教研究所がカルプレスの努力によって設立された [Chheat et al. 2005: 20-25; Filliozat:1969: 2]⁶。1939 年 5 月 9 日、王立図書館は条例 9 号によって仏教研究所の関係機関となった後、1942 年に完全統合された。同図書館の事業や人材は研究所に移管され、高等パーリ語学校からの人材派遣は停止された。また、仏教図書館が研究所に設置され、聖典、写本などは王宮に返却された。最終的に 1943 年の王令により王立図書館の名称はなくなり、仏教研究所図書館として再編されることとなった [Chheat et al. 2005:33]。

2. 仏教変革派の意図

カンボジアの仏教は 19 世紀半ばアン・ドゥオンが国王に即位したときに新たな幕を開けた。国王アン・ドゥオンは衰退したカンボジアの仏教を復活させるため、シャムで修行中の僧ティアンを呼び戻してサンガの再興を託し、また、僧パーンには厳しく戒律を守るトアンマユット派を興させた。トアンマユット派に対して旧来の仏教はモハーニカーイ派と称されるようになった。プノンベンにウナローム寺が建立されるとティアンは住職となり、モハーニカーイ派管長に指名された [シン 2012:31-35]。ウナローム寺では仏教変

革の草分けとなるタオンが修行し、その後、彼の弟子からチュオン・ナート、フオト・タート、ルヴィー・アエムなどの変革派僧が育っていった。

当時のカンボジアは長く続いたシャムやベトナムとの戦乱⁷のため三蔵經典類は散逸し、学識ある僧もいなくなっていた。仏教は土着宗教化し、戒律を守るべき僧の破戒も日常化するなど清浄さを失ったため三蔵に忠実な仏教の再興が急がれた⁸。いち早く仏教衰微の危機を意識したタオンは、原典パーリ語三蔵を求めてシャムに留学し、多くの經典を持ち帰って研究していた⁹。彼は未熟な僧が読めるように、弟子であるチュオン・ナートやフオト・タートにそれらの經典を貸し与えクメール語に翻訳させることに力を入れはじめた [フオト 1927:113-114]。これらの仏教変革派僧たちは貝葉に刻まれた仏典を解説し、編集して書籍にする活動を始めた。パーリ語の仏典を読み理解した彼らは、従来の実践は間違いであり、律蔵に忠実な実践に改めるべきだと主張しはじめた。ティアンが入滅するとカエ・ウクが住職となり、彼を中心としたモハーニカーイ派の伝統派は変革派と激しく対立していった [フオト 1970:8-9]。

当時のフランス保護国、カンボジア王国政府もサンガの分裂を恐れ、伝統派に肩入れしたため抵抗の勢いが強まったが、変革派は仏典に沿った戒律実践を果敢に主張し、パーリ語仏典をクメール語に翻訳してサンガや在家に普及する運動を進めた。彼らは戒律に関する翻訳書を印刷しようとしたが、貝葉に刻まれたもの以外、紙に印刷した戒律書は戒律とは見なさずとする宗教省の見解で容易に事は進まなかった。チュオン・ナートとフオト・タートは、1922 年に留学したフランス国立極東学院 (EFEO・在ハノイ) で院長のルイ・フィノーにカンボジアの理不尽な非文化的印刷事情¹⁰の改善を訴えた。その結果、彼らの意向はフランス保護国政府に伝わり、仏教書の自由な印刷が許可されることとなった [フオト 1970:7-36,52-55]。

1922 年にそれまでのパーリ語学校が高等パーリ語学校に改編され [EFEO 1922:377]、変革派のタオンが引き続き学校長に選任された。彼は仏典に準拠した戒

律に忠実な僧の育成に努め、留学から帰国したばかりのチュオン・ナートやフオト・タートも教授として教壇に立った。EFEOの支援を受けたこの学校ではパーリ語のみならず、仏教教理、サンスクリット語、フランス語、カンボジア史、アジア地理などもカリキュラムに組み入れられ〔EFEO 1922:377〕、僧侶の高等教育機関としての役割が期待された。

一方で、この時代、フランス保護国体制下にあったカンボジアの大衆は社会の底辺で呻吟していた〔オズボーン 1996:139, ポイ 2016:91-101〕。貧困や無知は大衆の仏教離れを引き起こす要因となった¹¹。サンガは在家からの布施がなければ成り立たない〔奥平 2016:172〕¹²。そのため、仏教変革派は厳しい現実からくる一般の人々の仏教離れが仏教を衰微させることを危惧し、積極的な在家への伝道活動の必要性を感じた〔フオト 1927:113〕。彼らは一般の人々が仏教教理を理解しやすくするため積極的に仏典のクメール語翻訳を進めた。彼らが説く仏教の教えは、五戒の順守や積徳行を説くだけでなく、出家者が自らの解脱のために必要とする奥深い教理を在家に対しても説くものであった。上座仏教の救済はあくまで自己の精進によってしか実現できない。精進を説く上座仏教の教理は、一般の人々にとって生きる上での実践倫理として受け止めることができ、その教えを自らの生活に活かせば経済的にも精神的にも自立を促す指針となる。変革派僧は、パーリ語の経を唱え自らが仏教教理を深く研究するだけでなく、その教えを広く一般の人々に伝える必要性を認識した。その意識は仏教書の印刷発行の自由化を求める彼らの主張から汲み取ることができる〔フオト 1970:51-55〕。

そのような思想が強まる時期に生まれたのが王立図書館である。上座仏教の聖典である三蔵を完備し、その系統だった研究と伝道がサンガの使命であると認識していたタオンをはじめとする変革派僧は、信頼するフランス人学者カルプレスに仏典の研究機関設置を訴えたものと思われる。文化の保護を図ろうとしたカルプレスはカンボジア仏教のよき理解者であり、仏教改革派の支援者であった。王立図書館はカンボジア全土

から仏典や仏像、仏教に関わる資料や品々を収集し研究した。また、在家向けの仏教書を印刷し、発行したことにより仏教変革運動が目指す在家への伝道は着実に進んでいくこととなった。

3. 『カンプチア・ソリヤ』と仏教

3.1 初期『カンプチア・ソリヤ』の概要

『カンプチア・ソリヤ』は、高等パーリ語学校長タオンが述べているように、カルプレスの尽力で発行されることとなった〔タオン 1926:6〕。ただし、編集方針について彼女が積極的に関与したかどうかは明らかではない。また、初期の各号記事内容を見ても編集が計画的に行われているようには見受けられない。毎月2回発行の計画であったが〔ノロドム 1926:1〕、実際には1926年度には1号のみ、1927年度は計8号、1928年度は計4号、1930年度～1931年度には計12号と年度によって発行部数はまちまちである。1932年度には6号を統合して一冊、更に3号を統合して一冊とし、1933年からは3号1冊にして年間4冊という変則的な発行方式が取られた。1940年からは毎月発行に戻っている。購読料も当初は1年間12号で6リエルとしたものを1933年度から年間4リエルに値下げし、フランス語の見出しと目次を入れ、写真記事を取り入れるなど読者層を広げようとする試みが見られる。記事数では創刊号で15編掲載されたものが、1927年第3号を境にして掲載記事は極端に少なくなり、同時に仏教関連記事も減少している。第5号以降は4編にまで激減し、この傾向は1928年以降も続いている。その原因が編集方針の内部的葛藤にあったのか、費用削減策であったのかを示す材料はない。

この時期の記事内容は仏教、人物紹介、歴史関連、一般的記事などで構成されるが、中でも仏教関連記事が目につく。カルプレス自身も大乘仏教の弥勒菩薩に関する記事などを執筆している〔カルプレス 1927:26〕。また、人々の啓蒙を促す記事内容は創刊号を除いて見るができなくなっていることから、早い段階で編集方針が仏教と文化に固まったことが推

測される。しかし、1928年には仏教書籍の発刊が増え、読者からの要望もあったことから仏教関連記事を減らし〔Chheat et al. 2005:18〕、1940年にも編集方針で仏教関係を少なくすることが打ち出されるなど〔カンプチア・ソリヤ 1940:3〕、編集方針の揺れが認められる。1943年に王立図書館が仏教研究所に統合されると同時に同誌の発行も同研究所に移管された〔笹川 2006:89〕。

特に詳しい編集方針は明らかにされていないが、発刊の目的¹³について国務宗教大臣ノロドム・ピアノヴォンは創刊号のあいさつで、教典をはじめとする文献を読みたくても王立図書館まで来ることができない遠隔地の人々に情報がいきわたるようにこの雑誌が発行されたと述べている〔ノロドム 1926:1-2〕。

次項で概観するように、1926年度創刊号から1927年度第7号における執筆者は僧、王族、大臣などが目立つ。またウム・スーヤルヴィー・アエムなど変革派僧が多少高度な教理を分かりやすく解説しようとしていることが読み取れる。創刊号ではノロドム・ピアノ

ヴォンの発刊の辞に続く筆頭記事として高等バーリ語学校校長タオンの仏教教義解説が掲載されていることは、同誌が仏教を重視していたことを示している。タオンはチュオン・ナート、フオト・タートなど仏教変革派の師であり、仏教変革運動の先駆けとなった人物である。これらの記事内容から、変革派が実践倫理仏教の基本思想を広めるための伝道用メディアとして同誌を活用しようとした意図を窺うことができる。經典の研究と仏教書の編集が進み始めると、変革派の仏教教理のクメール語による伝道手段は書籍に移っていき、同誌は歴史、文化、文学など幅広いテーマを掲載するようになっていった。

3.2 『カンプチア・ソリヤ』(1926年第1号～1927年第7号)掲載記事一覧

初期の同誌記事の内容を知るため、目次と執筆者を一覧表として示す。なお、*印は仏教関連記事を示すため筆者が付したものである¹⁴。

(1) 1926年度第1号

	目 次	執筆者
1	発刊の辞	ノロドム・ピアノヴォン
2	経蔵増支部カリウム経 *	タオン翻訳編集
3	図書館からの告知	王立図書館
4	オーグスト・パーヴィ氏について	執筆者不明
5	パナーチャー氏のご逝去	執筆者不明
6	最初の宗教について概説	ワタナヤヴォン
7	役に立つことを示す	チュオン・ヘール
8	ブッダの勝利吉祥の教え *	オクニャ・スッタン・ブリジャ・アン
9	説法僧を招請する *	同上
10	王立図書館を開設した高等弁務官への思い	ノロドム・ピアノヴォン
11	精進話 *	オクニャー・ソピアティリヤチ・スー
12	詩	ノロドム・ピアノヴォン
13	ドムナク寺アト住職 *	コイ、チュト、チャン、トゥム
14	ジャータカとブッダの悟り *	オクニャー・チュオン
15	チベット仏教に関する法話 *	コマンダン・ルーベル
16	ブッダの歴史 *	ルイ・フィノー
17	食の話 *	アエム

(2) 1927 年度第 1 号

	目 次	執筆者
1	カンプチア・ソリヤの効果	ノロドム・ピアノヴォン
2	王立図書館の弥勒菩薩像 *	シュザンヌ・カルプレス
3	パーリ語仏典の説明 *	ソティアロス
4	三宝に捧げる *	ウム・スー
5	シンハラ殿下への弔辞	ヴァタチャヤヴォン
6	涅槃について *	ロベール
7	五戒に関する古詩 *	ヴォンサシベドニャノン
8	教訓話（書籍が出版されたため当誌に掲載しません）	オクニャ・スッタン・ブリジャ・アン

(3) 1927 年度第 2 号（僧が執筆した記事には**を付した。）

	目 次	執筆者
1	哀悼の辞	シュザンヌ・カルプレス（図書館長）
2	タオン師の入滅 **	ウム・スー（高等パーリ語学校校長・編集者）
3	タオン師の恩 **	フオト・タート（高等パーリ語学校教授）
4	タオン師への恩返し **	チュオン・ナート（高等パーリ語学校教授）
5	タオン師の恩 **	ルヴィー・アエム（高等パーリ語学校教授）
6	タオン師の恩 **	ミー（北部地区初級学問監督）
7	タオン師の恩 **	ロン（高等パーリ語学校教授）
8	タオン師の恩 **	イト・ハク（高等パーリ語学校教授）
9	タオン師哀悼	オクニャー・ヤン
10	タオン師哀悼	オクニャー・コン
11	タオン師の恩 **	ヘム（南部地区初級学問監督）
12	タオン師の恩	チョム・マウ（図書館事務）

(4) 1927 年度第 3 号

	目 次	執筆者
1	タオン師への哀悼の辞	ルイ・フィノー
2	涅槃像として降りてきた石像とリアムケー *	シュザンヌ・カルプレス
3	王が守るべき道 *	ドク
4	無明と知恵 *	ルヴィー・アエム
5	アンコールの起源	ルイ・フィノー
6	カンボジアの発展	インドシナ教育省ヘンリー・グオルドン
7	教訓話	オクニャ・スッタン・ブリジャ・アン
8	マハーバーラタ	クロセーム
9	経典・物品進呈に来館したコンボンチャム州代表	チョム・マウ

(5) 1927 年度第 4 号

	目 次	執筆者
1	ピアノヴォン宛返信	ルイ・フィノー
2	パーリ語仏典翻訳 *	ノン
3	インドシナ彫刻装飾	シュザンヌ・カルプレス
4	極東のフランス学校	チョム・マウ
5	アンコールワットの起源	ルイ・フィノー
6	教訓話（書籍が出版されたため当誌には掲載しません）	オクニャ・スットン・プリジャ・アン

(6) 1927 年度第 5 号

	目 次	執筆者
1	シソワット・モニヴォン国王即位	ソティアヌヴォン
2	〃	シュザンヌ・カルプレス
3	ラオス・シーサワンウォン国王訪問	執筆者不明
4	王立図書館について	シルヴァン・レヴィ

(7) 1927 年度第 6 号

	目 次	執筆者
1	スリランカの古い仏塔 *	ホカー
2	死を意識する瞑想 *	ウム・スー
3	アンコールワットの起源	ルイ・フィノー
4	教訓話（書籍が発刊されたため当誌には掲載しません）	オクニャ・スットン・プリジャ・アン

(8) 1927 年度第 7 号

	目 次	執筆者
1	リアムケーの燭台	シュザンヌ・カルプレス
2	涅槃についての説明 *	ロベール
3	コーチシナ寺院レポート *	フオート・タート
4	死を意識する瞑想 *	ウム・スー

3.3 記事に見る在家への伝道

1926 年～1927 年の同誌各号の掲載記事の中から仏教変革派の教理解説記事及びタオンが抱いた仏教変革思想を伝える記事を抽出し、一般の人々に向けてパーリ語三蔵の中の教理を説こうとした彼らの意図を明らかにする。

(1) 経蔵増支部カリラム経（កាលមស្កត្ត）（1926 年度第 1 号 2. pp. 3-12 タオン）

（要約）

最近我が国の発展は著しく、昔に比べると豊かになっているが、戒律を守ることを忘れたら仏教は衰退する。人々は方向を失い、知恵をなくして迷いを起こす。経蔵増支部に説かれる十の態度を避けることにより知恵が働き、人は正しい行いを

してまちがいを起こすことはない。そうすれば仏教は繁栄する。その十の態度とは、簡単に人の話を信じる、耳障りのいいことを信じる、噂を信じる、三蔵にはない呪文などのことばを信じる、固定観念にとらわれる、根拠のないものを信じる、習慣的なことを信じる、理由を考えない、自分の考えにあうものを信じる、巧みな言葉を信じる、間違った法を説く僧を信じることである。それらの態度を引き起こす五つの原因は、身・言・意で仏法を敬わない、心から経典を唱えない、それを護持しない、経典の真意を理解しない、それを実践しないことである。これらの態度を捨て去って実践するなら仏教は末永く栄えるだろう。

著者タオンはフランス人東洋学者ルイ・フィノーやシュザンヌ・カルプレスからも尊敬された学識のある僧であった〔フィノー 1927:227, カルプレス 1927:85〕。仏教変革派僧たちの師であり、彼の戒律重視の思想は若い僧たちに強い影響を与えた。また初代高等パーリ語学校校長（在職 1922 年～1927 年）として僧侶教育に尽力し多くの僧を育て、カンボジア、コーチシナの寺院に派遣した¹⁵。それによって仏教変革運動は大きく進展した。「カリウム」とは、パーリ語で「なさざるべきこと」の意味である。この記事はパーリ語経典の教えをクメール語で解説する形式がとられ、内容的には教理の説明というよりも、日常生活における実践倫理のすすめとして受け止めることができる。また、呪文を唱え仏典から離れたことを説く僧を受け入れないよう注意を喚起するなど、明らかに在家に向けた教理の解説が行われている。

(2) 精進話(1926 年度第 1 号 11. pp. 26-28 オクニャー・ソピアティリアチ・スー)

(要約)

精進を怠れば何かをやろうとしても成就しない。精進は知恵と財産を築く道である。我々人間は愚かなまま、貧乏なままではいけない。行動を変えて状況をよくしなければならぬ。正精進に

は四つの行いが伴う。即ち、悪い心が起こらず、それが起きないように努力すること、悪い心が起きてもそれを捨て去ること、良い心が生まれなければ、生まれるように努力すること、良い心が生まれれば、それがもっと盛んになるように努力すること、川は長ければ、深みがあり、短ければ浅い。たゆまず精進しなければ忘れてなくなってしまう。家は修理しなければ壊れ去る。仏教の教えに「多くを聞き、学ぶ者はすばらしい。来世も恵まれる」とある。ブッダは苦行して悟りを開いても寝て運を待つことはなかった。勉学、勤労に精進すれば必ず結果がある。精進は知識と財産を支え貧乏になることもなく、将来必ず繁栄をもたらす。

内容は仏教の八正道¹⁶のうちの正精進について一般の人々向けに語られている。ブッダは出家者のために解脱の方法として八正道を説いたが、この教えは人々が自らを救済する上でもっとも頼りになる実践倫理である。特に正精進とは、目的を持って努力をすることと理解すれば、人々は精進することによって必ず結果を得ることができることを知る。筆者はこの記事を読む知識人たちよりも社会の底辺の人々や知識のない農民を意識してこの記事執筆したものと考えられる。この記事の内容からも在家の自己救済を促そうとする仏教変革の基本思想を確認することができる。

(3) 三宝に捧げる (1927 年第 1 号 4. pp. 40-56 ウム・スー)

(部分訳)

ブッダへの捧げものをするとき、私はささやかながらブッダに捧げますという。仏法へ捧げるとき、私はささやかながら仏法に捧げますという。僧へ捧げるとき、私はささやかながらお坊様に捧げますという。信者は十四の捧げかたを意識し、純粋な気持ちで祈りを込めて捧げるとよい。どれかひとつでよい。即ち、①すべての僧へ②少数の僧へ③招いた僧へ④名札を持った僧へ⑤月の上弦

または下弦のどちらかで僧へ⑥戒律日に僧へ⑦月の上弦と下弦に僧へ⑧来訪した僧へ⑨でかける僧へ⑩病気の僧へ⑪介抱をしている僧へ⑫常に僧へ⑬庫裏に住む僧へ⑭当番の僧へ、である。

高貴なお坊様、私たちの托鉢を受けてくださる方は仏法を備え、仏法をもたらしてくださる。私たちは両親をはじめすべての恩ある人に捧げる。お坊様に捧げることはブッダ、両親、恩ある人に捧げることになる。

この記事では三宝を敬った捧げものと布施の意味を説く。パーリ語経文をクメール語に翻訳し、説明が施されている。このほかに、カテナ¹⁷、米、果物、御座所、御堂、庫裏、トイレ、耐久備品、ハチミツ、油、サトウキビ水、ヤシ水、薬を寄進する際の口上がパーリ語とクメール語で説明されている。仏教変革派はこれらの作法も仏典に基づく意味があることを説明し、在家の認識を促そうとしたものであろう。

(4) タオン師の恩 (1927 年度第 2 号 3. pp. 106-115 フォト・タート)

(要約)

サンスクリット語聖典に「太陽は蓮の池を作る。月は大きな蓮の花の弁を作る。それらは慈悲の雨となって我に落ちる」とある。人を教え導くとはこのようなことだ。パーリ語の教えには「良い大地にはよい果実が実る」ともある。慈悲あるところにある者は大きな喜びを得る。師はさまざまな恩恵を与えてくれた。まず、師は自らパーリ語三蔵のクメール語への翻訳を行い、私たちにそれを教えた。また、自費で三蔵を集め、それを広い心で人に貸し与えた。更に、師がパーリ語からクメール語に翻訳したものを校正させ、翻訳の仕方と内容を私たちに教えてくれた。パーリ語仏典の翻訳はパーリ語ができない人の役に立つためであり、それは人々に仏教の本当の教えを知らしめた。師は政府が食事代として毎月献上するお金¹⁸を多くの比丘や沙弥にあげ自分の蓄えにはしなかった。

師はこのように慈悲の僧であった。

ここで述べられているように、自ら三蔵翻訳に取り掛かり、チュオン・ナートやフォト・タートに翻訳の指導をしたのはタオンであった。このことから、仏教変革運動の草分けがタオンであったことは明らかである。また、仏典の翻訳はパーリ語を理解できない在家の人々に仏教の本質的教えを伝えるためであったことが語られ、仏教変革運動の基本理念が在家に対する仏典の教えの伝道であったことが明白にされている。

なお、同誌のタオン追悼特集号の執筆者一覧を見ると、高等パーリ語学校教授、地区初等教育担当僧が名を連ねており、タオンの弟子である仏教変革派が僧侶教育を一手に担っていた事実が明らかにされている。このことは、変革派が目指す仏教、即ち三蔵經典に忠実であろうとする仏教が当時のサンガにおいて大きな潮流になっていたことを示している。

(5) 無明と知恵 (1927 年 第 3 号 4. pp. 247-251 ルヴィー・アエム)

(部分訳)

相応部第 14 巻に、ある比丘がブッダに質問する場面が記されている。パーリ語の意味はつぎのようなものである。「ブッダは無知な行いを無明と呼ばれましたが、無明とはどのようなものですか、また、無明の中にある人はどのような理由によるのですか。」ブッダはこのように答えた。「比丘たちよ、まさに苦しみの中で確かなことが分からない無知、苦しみを生み出す欲望の中で確かなことが分からない無知、苦しみを鎮める方法をさがしながら確かなことが分からない無知、苦しみを鎮める行いをしながら確かなことが分からない無知、比丘たちよ、この四つの無知を無明という。無明に囚われた人はそのような人たちである。」「ブッダは確かなことを知った行いを知恵と呼ばれましたが、その知恵とはどのようなものですか、知恵に至った人はどうしてそこに至ったのですか。」ブッダはこのように答えた。「比丘たち

よ、まさに苦しみの中で確かなことを知ること、苦しみを生み出す欲望の中で確かなことを知ること、苦しみを鎮める方法をさがしながら確かなことを知ること、苦しみを鎮める行いをしながら確かなことを知ること、比丘たちよ、この四つの知を知恵という。知恵に至った人はそのような人たちである。」

誌上ではパーリ語経典を全文表記し、それにクメール語の対訳を付している。仏教では無明は人間の煩惱の根源とされる。その後も比丘の質問が続き無明が人間を捉えたら五感はどうなるのか、という問いに対し、ブッダは心と体は苦しみに襲われ、人間は核を失い欲望が強くなると答える。パーリ語経蔵相应部の中に書かれた教えであり、通常人々がこのような教義を聞く機会は少なかったであろう。仏教変革派はこのような基本的な教えを人々に知らせようとしたことが理解できる。

(6) 死を意識する瞑想 (1927 年度第 6 号 2. pp. 455-481 ウム・スー)

(部分訳)

死を意識した瞑想を盛んにしようとするれば常に死を意識の中に置いて修行するのがよい。一つの世界で限りある命を持つ者が向かうものが死である。何者であれ命ある生き物として世に生まれた者は、その世を離れる。即ち死が待っている。この死は瞑想を通して意識されるのがよい。死には3種類ある。即ち、滅却した死、刹那の死、静寂の死である。滅却した死は輪廻の苦しみを脱した阿羅漢が得る。刹那の死は全ての感官を滅した行法の人得る。静寂の死は樹木が死ぬ、真鍮や鉄が死ぬようなものだという人もいる。修行に励む者はこの三つの死を瞑想の中で意識的に望んではない。意識しておくべきは、寿命による死と寿命によらない死があるということである。

ここで述べられている内容は、死の恐怖から逃れる

方法や死後の世界に関する事ではない。死は全ての生物が受け入れなければならない宿命であることを前提として語られ、死を常に意識の中に置きながら修行に努めることの大切さが説かれる。当時一般の人々は僧から功德に関する説教や布施太子物語などを聞いていたであろうが [Edwards 2008:100]、死を冷静に見つめる教えに触れる機会は少なかったものと思われる。ウム・スーはこの難しい教えについて敢えて一般の人々への説明を試みている。

パーリ語三蔵で説かれる仏教教理は一般の人々にとって容易に理解できるものではなかったが、以上のように仏教変革派の僧は難しいテーマについてクメール語で説明し、人々の理解を促そうと努めていることが窺える。仏教の深い教えに触れることによって人々はその意味を考え、深く考えることによって知恵を得ることができる。その知恵は人々がよりよく生きる上での自覚につながる。仏教変革派の僧たちは、そのような認識をもって三蔵の教えを伝道したものと考えられる。

ところで、仏教変革運動においてはチュオン・ナート、フオト・タートなどが中心的な人物と見なされがちであるが、仏教変革はタオンの存在なくしてこれほどの成果を挙げることはできなかったといってもよい。彼らはタオンの指導力のもと強い結束力をもって運動を進めた。仏教変革派が三蔵のクメール語訳に拘った理由は、『カンブチア・ソリヤ』タオン追悼特集号に寄せた弟子たちの記事におけるタオンの仏教変革に対する基本思想から知ることができる。仏教変革派の運動理念は誰でもが理解できる仏教の確立であったといえる。

4. 王立図書館及び『カンブチア・ソリヤ』と仏教変革運動

先に述べたとおり、『カンブチア・ソリヤ』創刊号で最初に目にする仏教記事はタオンの仏典教理に関する説明である。タオンは仏教変革派の先駆けとして、また、高等パーリ語学校校長として若い僧を指導

した。彼が戒律を重視し、その教育に熱心であったことやパーリ語仏典の翻訳を弟子たちに託したことは、彼ら自らが明らかにしているとおりである。そのタオンをはじめとする変革派とカルプレスの強い絆は[Chheat et al. 2005:25]、追悼特集号に彼女が深い哀悼の辞を寄せていることから察することができる。また、高等パーリ語学校から同図書館に人材を派遣することによって相互の情報交換や協力体制も整っていた[Chheat et al. 2005:13,35]。これらのことは仏教変革派とカルプレスが「カンボジア仏教の保護」という理想¹⁹を共有し、王立図書館を拠点として様々なプロジェクトに取り組んだことを裏付けている。

仏教変革にとってクメール語による教理の伝道は運動の生命線となった。この伝道運動は、仏教関係書籍の自由な印刷が認められた1920年代前半あたりから徐々に活発化し、王立図書館の設立がその流れを勢いづけた[フオト 1970:53-54]。同図書館の設立はカンボジア国内に散逸していた三蔵經典を効率的に集めることを可能にし、それによって変革派による仏典のクメール語への翻訳は急速に進み始めた[Chheat et al. 2005:18]。図書館の出版部門がそれらを印刷し、付属の書店や地方の書店で販売し、また図書館車によって各地の人々にその普及を図った。ウム・スーとチュオン・ナートの共著でクメール語による在家のための『三宝崇拝及び在家戒律概説』が発行されるなど、それまで重視されなかった在家に向けた伝道活動²⁰が活発化するものこのころである。

また、王立図書館は幅広い活動によって文化の保護を図るとともに、社会と仏教との新たな関係作りにも貢献した。1938年7月30日の『ナガラワッタ』第2年80号に「クメール語辞典が出た!!!」(原文ママ)との見出しで王立図書館から辞典上巻が発刊されたことが報じられた²¹。チュオン・ナート編纂によるこの辞典[チュオン 1967]では約1万語の見出し語中、パーリ語を語源とする語彙約2,400語²²を抽出できるが、これらの多くは仏教用語²³であり、国語辞典の中においても語彙の解説をとおして人々の仏典理解を助けようとする仏教変革派僧の意図を認めることがで

きる。また、同図書館はユースホステル活動も積極的に支援した。各地の寺院がユースホステルとして協力する意向を示していたことは[坂本・岡田 2019:731]、仏教が社会における新たな役割を認識したことの表れでもあった。

1926年に『カンプチア・ソリヤ』が発刊されると仏教変革派の活動は更に勢いを増した。同誌の仏教に関する記事内容で明らかなおりで、彼らはパーリ語三蔵に書かれた教理をクメール語に翻訳し、さらに分かりやすい説明を加えた。そこには在家の人々に対し奥深い仏教教理の理解を促そうとする伝道者の姿勢を見ることができる。また、読者である知識人だけではなく、社会の底辺の人々にも教理が理解できるように平易な説明がなされている。その内容は、輪廻転生や天国での生まれ変わりなど経験不可能の世界に関する教えではなく、パーリ語三蔵で説かれる教理や一般の人々の自己救済を促す実践的な教えを説くものである。

各地の寺院には高等パーリ語学校を卒業した僧が派遣され、説法に努めた[Hansen 2011:138]。彼らは教理を布教するための材料として『カンプチア・ソリヤ』を活用したことであろう。各寺院の僧は同誌を読み聞かせることによって、文字が読めない社会の底辺の人々や農民にも仏典に書かれた仏教の教えを平易に伝えることができた。このようにしてカンボジア仏教は従来の二重構造的仏教から、一般の人々の自己救済を促す実践倫理としての上座仏教へと変質する素地を作った。王立図書館はパーリ語三蔵經典の翻訳機関として、『カンプチア・ソリヤ』はクメール語による教理の布教媒体としてその質的变化に寄与したのである。

おわりに

仏教の衰亡に危機感を抱いたモハーニカーイ派の僧たち²⁴によって始まった仏教変革運動は、三蔵に書かれた教えに忠実であろうとする仏教の流れを作り、その思想は多くの僧に共有されるようになっていった。

しかし、一般の人々が仏教の基本的な教理を理解し、その理解の上に立つ人々がサンガを支える構造を確立しなければ仏教の存立は万全とはいえなかった〔フォト 1970:66〕。仏教変革派の僧たちはそのことに気づき、高等パーリ語学校校長タオンやチュオン・ナート、フォト・タートなど変革派僧は一般の人々の仏教理解を促すため、パーリ語三蔵經典のクメール語訳を進めて印刷物として普及させ、仏教教理を伝道することに傾注した。

まず、彼らは従来管長の認可が必要であった仏教書の印刷発行の自由化を EFEO の力を借りて実現させた。これによってクメール語によるパーリ語仏典の翻訳書や解説書が発刊され、だれでもが自由に読むことができるようになっていった。次に三蔵の集中的な研究拠点を必要とした彼らは、カンボジア仏教の保護に意欲的であったカルプレスに王立図書館の設立を働きかけた。彼女は当局に諮って王立図書館の開設を実現させ、同図書館から雑誌『カンプチア・ソリヤ』を発刊するなど仏教変革派の活動を支援した。王立図書館が設立されると、全国に散逸していた膨大なパーリ語三蔵經典や文物が同図書館に集中的に収集されたことによって三蔵の研究は一挙に進み、系統的な翻訳が可能となった。さらに、変革派の僧たちは『カンプチア・ソリヤ』を活用して、仏教教理を一般の人々にもわかりやすく説くことに努めた。仏教書が多く発刊されは

じめたため同誌における仏教記事の割合は減っていくが、初期のころの同誌には仏教変革派僧たちが積極的に伝道しようとする記事が目立つ。

一般の人々が理解できる仏教を確立しようとする変革派の意図は、このようにして着実に実を結び三蔵翻訳のための国家的プロジェクトの基盤を作ることとなった。1929 年、国王布告 106 号によって三蔵委員会が編成され、パーリ語三蔵の本格的な翻訳が開始された²⁵。カンボジア仏教の聖典として一般の人々だれでもが理解できるクメール語三蔵經典を編纂するため、この委員会にはモハーニカーイ派の仏教変革派やトアンマユット派の僧をはじめ多数の在家仏教徒が参画した²⁶。三蔵委員会の設立によって仏教変革運動はピークを迎え、翌年の仏教研究所の設立はカンボジア仏教にとって新たな時代の幕開けを告げた。その後、在家に視点を向けたカンボジア仏教は人々の支持を得て、ブッダの教えをクメール語によって理解する民族の宗教〔Edwards 2008:96,118〕として社会に定着していくこととなった。

王立図書館はその後仏教研究所に統合され、『カンプチア・ソリヤ』の発行も同研究所に移管されたが、カンボジア仏教変革運動の中でサンガと一般の人々を結び付ける接点として、1920 年代後半この両者は大きな役割を担ったといえる。

注

- 1 カンボジアの上座仏教にはトアンマユット (dhamma yutti「仏法を正しく実践する」の意) 派とモハーニカーイ (mahā nikāya「大きな宗派」の意) 派の二派が存在する。いずれもスリランカ、タイ、ミャンマー、ラオスの仏教と同様に律蔵、経蔵、論蔵の三蔵を聖典とし、基本的に共通した教義を持つ。19世紀半ば、トアンマユット派がシャムからカンボジアに移入されると、従来からの仏教はシャム同様にモハーニカーイ派 (シャムではモハニカイ派) と称された。トアンマユット派は歴史的に王族の支援があり、モハーニカーイ派は一般の人々を信徒に持つ [石井 1996:131]。トアンマユット派管長はプノンペンのボトム・ヴァッダイ寺、モハーニカーイ派管長はウナローム寺での止住を慣例とした [笹川 2016:158]。現在でもカンボジアのすべての寺院と僧はいずれかの派に属し、両派とも国王に任命された管長が統括する。仏教変革運動当時、トアンマユット派とモハーニカーイ派伝統派はパーリ語三蔵經典のみを聖典としたのに対し、モハーニカーイ派変革派は經典のクメール語訳を進め、パーリ語經典同様に聖典とした。《参考：教派別内訳 (2009年現在) モハーニカーイ派 4,241 寺、僧侶数 53,430 人、トアンマユット派 151 寺、僧侶数 1308 人—出所：カンボジア宗教省 [上田、岡田 2014:83]》
- 2 即ち、同図書館はカンボジア政府の管理下に置かれた [Filliozat 1969:2]。
- 3 トアンマユットはタマユットのカンボジア語発音で、シャム国王モンクット (ラーマIV世在位 1851~1868) が興した戒律に厳格なタマユット派に倣って興された。
- 4 1909年、三蔵研究のため寄付に頼ったパーリ語学校が設立された。同校は1911年に閉校されたが、EFEOの支援を受けて新たに1914年に再開され、更に1922年、高等パーリ語学校に改編された。
- 5 辞典にはパーリ語—サンスクリット語—クメール語、クメール語—フランス語、フランス語—クメール語などがあった。
- 6 1928年、カルプレスはコーチシナ小総督に同地におけるカンボジア仏教保護強化の必要性を報告、インドシナ総督がフランス領インドシナ全体の上座仏教保護のため設立を許可した [Chheat et al. 2005:20-21]
- 7 17世紀以降カンボジアの王族はシャムとベトナムを引き込んで内紛を繰り返した。1832年、カンボジアの支配をめぐるシャムとベトナムが衝突、1845年まで戦争が繰り返された。
- 8 クロム・ゴイの詩「サンガへの訓戒」[1935]では呪術を行う僧や破戒僧が糾弾されている [ボイ 2016:102-116]。
- 9 19世紀末、戒律を重視するシャム・タマユット派の仏教思想はバンコクのモハニカイ派にも広まっており、カンボジアのモハーニカーイ派留学僧はこの思想的影響を受けた [Hansen 2011:92]。
- 10 当時カンボジアではトアンマユット、モハーニカーイ両派とも仏教書の印刷発行にあたっては管長の許可を必要とした [フォト 1970:51]。
- 11 詩人クロム・ゴイは人々が自立した生活をするため、無知や怠惰を戒め仏教に帰依するよう強く訴えた [ボイ 2016:1-76]。
- 12 布施は托鉢、戒律日、年間の仏教行事をととして寺院ごとに集められ、さまざまな運営費用に充てられる [大坪 2016:23-26]。
- 13 『小史』では創刊目的を、「カンボジア人の啓蒙と宗教に関する知識を深めさせること」であるとしている [Chheat et al. :2005:18]。
- 14 以下、特に断りがない限り、カンボジア語訳は筆者による。
- 15 チュオン・ナートは1933年にコーチシナのカンボジア仏教寺院を視察した際、高等パーリ語学校を卒業した僧に出会った [チュオン 1936:26]。
- 16 ブッダは苦の滅尽に至る道として「正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定」の八正道を説いた。
- 17 僧衣とするための布。
- 18 パーリ語学校 (後に高等パーリ語学校) 校長を務めたタオンに対して、政府は戒律に反する給与ではなく、食事代の名目で布施したものと考えられる。
- 19 カルプレスは「カンボジア仏教を単なる宗教としてではなく、社会を維持する強い精神的な力として考えるべきである」と記している [Goodman 2018:238]。
- 20 現存原始經典は出家者に対する教説が中心で在家者に対する教説は少ない [浪花 1987:3]。
- 21 『ナガラワッタ』の翻訳については、坂本・岡田 [2019:451] による。同辞典下巻は1943年に仏教研究所から発刊された。

- 22 「サンスクリット語およびパーリ語語源（または、推測される）」と辞典に表示されている語彙約 1,630 語、「パーリ語語源」と表示されている語彙約 770 語。
- 23 ចតុរិយសច្ច (四聖諦) ញាណ (悟り) បរមាភិសម្ពោធិ (ブッダの悟り) ពោធិបក្ខយធីម (道品) など。
- 24 トアンマユット派はパーンがシャムから帰国する際にパーリ語三蔵 40 巻をもたらしていた [ស៊ីង 2012:40]。そのため、モハーニカイー派のように仏典を整備する必要はなかった。また、王族の支援を受けていた同派は仏教衰微に対する危機意識において、農民をはじめとする一般大衆を在家信徒とするモハーニカイー派とは隔たりがあったものと考えられる。
- 25 1968 年全 110 巻が刊行された [リー 1968:48]。
- 26 第 1 次三蔵委員会 (1929 ~ 1940) には委員 37 名中 11 名の在家が参画した [リー 1968:43-44, シン 2005:39]。委員長にはモハーニカイー派変革派のルヴィー・アエム、副委員長にウム・スーが選任され、チュオン・ナート、フオト・タートなども委員として加わった。また、シュザンヌ・カルプレスはカンボジア理事長官、内閣の各大臣などとともに発起人として名を連ねた。

参考文献

- 石井米雄. 1969. 『戒律の救い：小乗仏教』. 京都. 淡交社.
- . 1996. 「宗教と世界観—4 サンガ組織」『もっと知りたいカンボジア』綾部恒雄・石井米雄編. 東京. 弘文堂. pp. 129-138.
- 上田広美、岡田知子. 2014. 『カンボジアを知るための 62 章 (第 2 版)』. 東京. 明石書店.
- 大坪加奈子. 2016. 『社会の中でカンボジア仏教を生きる』. 東京. 風響社.
- 奥平龍二. 2016. 「第 6 章 上座仏教と国家—3 上座仏教国家」『上座仏教事典』. パーリ学仏教文化学会上座仏教事典編纂員会編. 東京. めこん.
- オズボーン、ミルトン. 1996. 『シハヌーク：悲劇のカンボジア現代史』石澤良昭監訳・小倉貞男訳. 東京. 岩波書店.
- 坂本恭章、岡田知子. 2019. 『ナガラワッタ』上田広美編. 東京. めこん.
- 笹川秀夫. 2006. 『アンコールの近代—植民地カンボジアにおける文化と政治』. 東京. 中央公論社.
- . 2009. 「植民地期のカンボジアにおける対仏教政策と仏教界の反応」京都大学グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」ワーキングペーパー, Area Studies No. 85. pp. 1-27.
- . 2016. 「第 5 章 各国・地域の上座仏教—9 カンボジア仏教の宗派・サンガ組織」『上座仏教事典』パーリ学仏教文化学会上座仏教事典編纂員会編. 東京. めこん. pp. 158-159.
- シルベストル・A. 2019. 『カンボジアの行政』坂本恭章訳、上田広美・岡田知子編. 東京. めこん.
- 中村 元. 1972. 『原始仏教の生活倫理』. 東京. 春秋社.
- 浪花宣明. 1987. 『在家仏教の研究』. 京都. 法蔵館.
- 水野弘元. 2000. 『パーリ語文法』. 東京. 山喜房佛書林.
- Chheat Sreang, Yin Sombo, Seng Hokmeng, Pong Pheakdeyboramy, Saom Sokreasey. 2005. *THE BUDDHIST INSTITUTE A Short History* (ប្រវត្តិសង្ខេបបណ្ឌិតសភាសម្ពុទ្ធិវិទ្យា). Edited and translated by Penny Edwards. Phnom Penh. Buddhist Institute.
- Chigas, George. 2000. “The emergence of twentieth century Cambodian literary institutions: the case of *Kambujasuriya*”. in *The Canon in Southeast Asian Literatures*, edited by David Smyth. Richmond, Surrey. Curzon Press. pp. 135-146.
- Edwards, Penny. 2008. *Cambodge: The Cultivation of a Nation, 1860-1945*. Honolulu. University of Hawai'i Press.
- EFEO. 1922. Chronique. *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, tome 22: p. 377.
- Filliozat, Jean. 1969. “Suzanne Karplès”. in *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, tome 56. pp. 1-3.
- Goodman, Joyce. 2018. “Suzanne Karplès (1890-1969): thinking with the width and thickness of time”. in

- Bildungsgeschichte International Journal for the Historiography of Education* 2-2018. pp. 231-244.
- Hansen, Ann Ruth. 2011. *How to Behave*. Honolulu. University of Hawai'i Press.
- Khing Hoc Dy. 2006-2007. "Suzanne Karplès and the Buddhist". in *Sikṣācakra* 55 No. 8-9, Center for Khmer Studies. pp. 189-191.
- ការបីឡេស. 1927. "សេចក្តីសម្គាល់ អំពីរូបព្រះមេត្រីពោធិសត្វដែលតាំងនៅព្រះរាជបណ្ណាល័យ". in *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ១. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 11-13. (カルプレス. 1927. 「王立図書館の弥勒菩薩像」『カンプチア・ソリヤ』第2年度第1号. プノンペン. 王立図書館. pp. 11-13.)
- កម្ពុជសុរិយា. 1940. "អាប្បកថា នៃទស្សនាវដ្តី". in *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់១២ខ្សែ១. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. p.3. (カンプチア・ソリヤ. 1940. 「巻頭の辞」『カンプチア・ソリヤ』. 第12年度第1号. プノンペン. 王立図書館. p. 3.)
- ក្រុងកំបូរជាតិ. 1925. *រាជកិច្ចរាជ្យ*. លេខ២. pp. 24-29. (カンボジア国王. 1925. 『国王布告』第2号. pp. 24-29.)
- ជួន ណាត. 1936. "បរិវត្តន៍នាគម ដំណើរអង្គការណែនាំស្តីពីស៊ីន". in *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំទី៨ខ្សែ១០. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. p. 26. (チュオン・ナート. 1936. 「コーチシナ紀行」『カンプチア・ソリヤ』. 第8年度第10号. プノンペン. 王立図書館. p. 26.)
- . 1967. *វចនានុក្រមខ្មែរ ភាគទី១ ភាគទី២*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (チュオン・ナート. 1967. クメール語辞典上巻・下巻. プノンペン. 仏教研究所.)
- ថោង. 1926. "កាលាសូត្រ". in *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំដំបូងខ្សែ១ដល់១៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 3-12. (タオン. 1926. 「経蔵増支部カリヤム経」『カンプチア・ソリヤ』. 初年度第1号. プノンペン. 王立図書館. pp. 3-12.)
- នគរវត្ត. 1938. "វចនានុក្រមចេញហើយ!!!". in *នគរវត្ត*. ឆ្នាំទី២លេខ៨០. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. p. 3. (ナガラワッタ. 1938. 「クメール語辞典が出た!!!」『ナガラワッタ』第2年80号. プノンペン. 仏教研究所. p. 3.)
- នរោត្តមភាណុវង្ស. 1926. "ព្រះបន្ទូលក្រុម". in *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំដំបូងខ្សែ១ដល់១៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 1-2. (ノロドム・ピアノヴォン. 1926. 「発刊の辞」『カンプチア・ソリヤ』. 初年度第1号. プノンペン. 王立図書館. pp. 1-2.)
- ពុយ តា. 2016. *ក្រមរុយ*. ភ្នំពេញ. ពន្លឺខ្មែរ. (ボイ・キア. 2016. 『クロム・ゴイ』. プノンペン. ポンルークマエ.)
- ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. 1926. "ប្រកាស". in *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំដំបូងខ្សែ១ដល់១៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 13-14. (王立図書館. 1926. 「お知らせ」『カンプチア・ソリヤ』. 初年度第1号. プノンペン. 王立図書館. pp. 13-14.)
- លី សុវីរី. 2008. *ដំណើរប្រវត្តិ ស្តីពី សាលាបាលីជាន់ខ្ពស់ ព្រះរាជបណ្ណាល័យ និង ក្រុមជំនុំ៣*. ភ្នំពេញ. រោងពុម្ពម៉េងហាវ. (リー・ソヴィー. 2008. 『高等パーリ語学校、王立図書館及び三委員会の経緯』. プノンペン. メーンハーウ印刷所.)
- ល្វី ហ្វីណូត. 1927. "សេចក្តីពណ៌នាអំពីគុណធម៌របស់ព្រះមហាវិមលធម៌លោក". *កម្ពុជសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. in pp. 227-233. (ルイ・フィノー. 1927. 「タオン師への哀悼の辞」『カンプチア・ソリヤ』. 第2年度第3号. プノンペン. 王立図書館. pp. 227-233.)
- ស៊ីង សុវណ្ណនី. 2005. *ប្រវត្តិព្រះ ក្រៃបិដកខ្មែរ*. ភ្នំពេញ. (シン・ソヴァンニ. 2005. 『クメール語三蔵の歴史』. プノンペン.)
- . 2012. *មហាបុរស ពុទ្ធសាសនានៅប្រទេសខ្មែរ*. ភ្នំពេញ. IDEA BOOK (シン・ソヴァンニ. 2012. 『カンボジアの仏教偉人』. プノンペン. IDEA BOOK.)

- ស៊ីមរតនៈ. 2013. *សទ្ទានុក្រមព្រះពុទ្ធសាសនា*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (スム・ラタナ. 2013. 『仏教用語辞典』. プノンペン. 仏教研究所.)
- ហូត តាត. 1927. “សេចក្តីថ្លែងគុណ ព្រះមហាវិមលធម្មនាម ថោង”. in *កម្ពុជាសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ២. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 107-115. (フオト・タート. 1927. 「タオン師の恩」『カンブチア・ソリヤ』第2年度第2号. プノンペン. 王立図書館. pp. 107-115.)
- . 1970. *កល្យាណមិត្ត របស់ខ្ញុំ*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (フオト・タート. 1970. 『我が善友』. プノンペン. 仏教研究所)
- ហោត្រៃ. 2019 年 6 月 25 日アクセス . www.haotrai.com/kh/គម្ពីរកម្ពុជាសុរិយា-35. (ハオトライ. 2019 年 6 月 25 日アクセス . www.haotrai.com/kh/គម្ពីរកម្ពុជាសុរិយា-35.)
- អែម. 1927. “អំពីអវិជ្ជានិងវិជ្ជា”. in *កម្ពុជាសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 247-251. (アエム. 1927. 「無明と知恵」『カンブチア・ソリヤ』. 第2年度第3号. プノンペン. 王立図書館. pp. 247-251.)
- អ៊ុំ ស៊ីរ. 1927a. “រតនត្រយបូជា”. in *កម្ពុជាសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ១. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 39-56. (ウム・スー. 1927a. 「三宝に捧げる」『カンブチア・ソリヤ』. 第2年第1号. プノンペン. 王立図書館. pp. 39-56.)
- . 1927b. “មរណនុស្សតំកម្មដ្ឋានពីស្តារ”. in *កម្ពុជាសុរិយា*. ឆ្នាំគម្រប់ពីរខ្សែ៦. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 455-467. (ウム・スー. 1927b. 「死を意識する瞑想」『カンブチア・ソリヤ』第2年第6号. プノンペン. 王立図書館. pp. 455-467.)
- , ជួនណាត. 1996. *ត្រៃប្រណមសង្ខេប និង គិហិវិន័យសង្ខេប*. ភ្នំពេញ. ពុទ្ធសាសនបណ្ឌិត្យ. (ウム・スー、チュオン・ナート. 1996. 『三宝崇拝及び在家戒律概説』. プノンペン. 仏教研究所.)
- ឧកញ៉ាសុភាធិរាជ ស៊ី. 1926. “វិរិយកថា”. in *កម្ពុជាសុរិយា*. ឆ្នាំដំបូងខ្សែ១ដល់១៣. ភ្នំពេញ. ព្រះរាជបណ្ណាល័យ. pp. 40-43. (オクニャー・ソピアティリアチ・スー. 1926. 「精進話」『カンブチア・ソリヤ』. 初年度第1号. プノンペン. 王立図書館. pp. 40-43.)